

養老孟司さんの著書に「バカの壁」という2003年のベストセラーになったものがあります。その本で言っていることを一言でいうなら「人間というのは、結局自分の脳に入ることしか理解できない」というのです。皆さんは自分の「バカの壁」を打ち壊された経験はありますか？

ずいぶん前にお話ししたので二度目になる方もおられますが、わたしの経験をお話ししたいと思います。それは本日祈りに覚える東日本大震災で被災した教会、鹿島栄光教会でのことです。この教会を、被災直後の11年5月に友人牧師、信徒ら4名で訪ねました。今思い返せば、無知、不備ながら、とにかく訪ねるべきだとの勇む思いで現地の諸教会を訪ね回ったのでした。屋根を覆うブルーシート、古い木造の小さな教会の応接室に案内されて、S牧師に、開口一番大声で怒鳴られたのでした。南相馬市のなかでも最も南に位置しているその教会は、当然、地震と放射能による汚染の深刻な状況でした。少ない信徒のなかでも役員を務める方なども避難しているの教会の運営は困難を極めていたようです。付近を案内しながら牧師さんは、はじめに激高して怒鳴った怒り以上に優しく穏やかな口調で、なぜご自分が避難しなかったのか、理由をぼつりと話してくれました。もちろん教会の責任があたりだからですが、どうしても避難することができなかつた大きな理由は他にもありました。曰く、息子さんが重度の自閉症で、環境の変化に適応できないことが明らかだったからだとこののです。

その後しばらくして教団の災害救援委員会の通信だったか、S牧師さんが寄稿された記事を読み涙しました。S牧師さんはどこかに呼ばれて新幹線の車中から、福島多数の家屋の屋根にブルーシートが貼られている光景を眺めながら自然に涙が溢れてきたというのです。

わたしは自らを恥じました。教区でも常置委員(教区全体の役員のような務め)や社会委員会の重責を担い、被災地を訪ねてどんな支援がこれからできるのかというご立派な動機、とりわけ障がい者を含む社会の少数者を十分に考慮した支援を展開するという尊い動機を抱いているつもりだったその自分が、S牧師さんの開口一番の怒りとご自分の弱さを包み隠さず打ち明けてくださった、あの人間味あふれるメッセージが、現実をしっかりと受け止めるためにわたしの「バカの壁」を突き破ってくれたのです。いかにおごり高ぶりに満ちているかを痛感させられたのです。わたしは被災地域の現実をしつかりと認識できずに仮想の観念と自分が理想だと思い込んでいた支援を思い描いていたのです。月並みな言い方ですが自分だけにすべてを都合よく見える色眼鏡で被災地域の現実を見ていたのです。そんなことでは被災者に届く支援などできるはずありません。

▼聖書の解き明かし

ヨハネ福音書21章では、主イエスを失った弟子たちが、日常にもどりましたが、元漁師だったペトロが他の者たちを率いて漁をすることになりました。舟に乗り込んで網を投げるのです。▼これは「舟すなわち教会」の「漁」すなわち「宣教活動」を暗示する言葉でもあります。しかも漁は夜通し行う仕事ですから、教会は世の中が暗い時にこそ、宣教の活動を行うのです。▼しかし弟子たち

には問題がありました。それは、現実に出会う相手をしつかりと認識することができないということです。しかもその問題は自分にあるということを実感することができないのです。そのために、一晩中、漁をしても魚を捕ることができません。つまり弟子たち⇨教会が、時代が暗黒に包まれている中で、必死に働いても何の成果も上がらないのです。

1その後、イエスはティベリアス湖畔で、また弟子たちに御自身を現された。その次第はこうである。2シモン・ペトロ、ディディモと呼ばれるトマス、ガリラヤのカナ出身のナタナエル、ゼベダイの子たち、それに、ほかの二人の弟子が一緒にいた。3シモン・ペトロが、「わたしは漁に行く」と言うと、彼らは、「わたしたちも一緒に行く」と言った。彼らは出て行って、舟に乗り込んだ。しかし、その夜は何もとれなかった。

どうしてなのか？彼らには「食べ物」がなかったのです。すなわち、現実を理解するための信仰、それを育むための糧がないのです。それゆえ夜が明ける頃、岸に立っているイエスさまのことも分らないのです。

4既に夜が明けたころ、イエスが岸に立っておられた。だが、弟子たちは、それがイエスだとは分からなかった。5イエスが、「子たちよ、何か食べる物があるか」と言われると、彼らは、「ありません」と答えた。

しかし「舟の右側に網を打ちなさい」という言葉が彼

らの「バカの壁」を突き破ります。舟の右舷を英語ではスターボードといいます。これはステア・ボードがなまったものでステアリングとおなじ舵の側という意味です。右利きが多い社会ですから舵も右に取り付けるのです。しかも右は神が祝福される側です。したがって網は通常、舵に絡みつかないように左、左舷に投げていたと思われまゝ。普段考えもつかないところに網を投げるようにとの言葉に従つたのです。

夜通し漁をして自信も失っていた弟子たちはイエスの言葉に従うのです。自分の壁がイエスの言葉によって崩されたそのとき、彼らは収穫、祝福にあずかるのです。しかもこの言葉が、イエスが発せられた言葉であることが分からなくとも、その言葉に従った時に抱えきれないほどの収穫にあずかるのです。

直後にその言葉がイエスによるものだと分かった時、弟子たちの指導者ペトロは、思い上がった自らを恥じ入り、自分の愚かで軽率な行動を深く反省します。

6 イエスは言われた。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ。」そこで、網を打ってみると、魚があまり多くて、もはや網を引き上げることができなかつた。7 イエスの愛しておられたあの弟子がペトロに、「主だ」と言った。シモン・ペトロは「主だ」と聞くと、裸同然だったので、上着をまとい湖に飛び込んだ。8 ほかの弟子たちは魚のかかった網を引いて、舟で戻って来た。陸から二百ペキスばかりしか離れていなかったのである。

空腹で夜通し働いたために疲れ果てているけれども、収穫の喜びに充たされてイエスが待つておられる岸にあると、魚とパンが用意してありました。いまや皆が主の食卓に招かれているのです。

9 さて、陸が上がってみると、炭火がおこしてあった。その上に魚がのせてあり、パンもあった。10 イエスが、「今とつた魚を何匹か持つて来なさい」と言われた。11 シモン・ペトロが舟に乗り込んで網を陸に引き上げると、百五十三匹もの大きな魚でいっぱいであつた。それほど多くとれたのに、網は破れていなかった。

12 イエスは、「さあ、来て、朝の食事をしなさい」と言われた。弟子たちはだれも、「あなたはどなたですか」と問いたがそうとはしなかつた。主であることを知っていたからである。13 イエスは来て、パンを取つて弟子たちに与えられた。魚も同じようにされた。14 イエスが死者の中から復活した後、弟子たちに現れたのは、これでもつ三度目である。

今、わたしたちの日常もかつて非日常だった状況にあると頭では理解しています。いつの間にか非日常に適應しているのです。実感がありません。時代は、非日常の夜なのかもしれません。これからはしばらく厳しい状況が続くような予感をもって日々の生活を営んでいます。

皆さんには食べ物ありますか？スーパーで買いためできる口から入ってトイレで排泄する方の食べ物ではなく、暗闇でもよく見るための心の食べ物がありますか？残念

ながら、今、会堂の礼拝もなく、主の食卓もしばらくもつことができませぬ。しかし「舟の右側に網を投げなさい」というだれが発したのかわからない、しかも考えも及ばないようなことをなすようにと命じられる、この言葉に、自分を廃して従つてみようではありませんか。

先日ある役員からのメールでハッとさせられました。通常の礼拝にいかにして戻していくかの議論を始めるときだとおっしゃるのです。長期化しそうな非日常、あるいは回復しても以前とは違つ日常になるのかもしれないのです。現実をしっかりと認識するためにわたしたちには「食べ物」が必要です。主イエスが備えられる食卓の礼拝が、再びはじまる日を待ち望みつつ、祈りましょう。

